

びらうどあふひ

筆致スコトニシタ(昭和七年五月)

○びらうどあふひ

津村研究所 木村 雄四郎



びらうどあふひ (Althea officinalis L.)
(昭和六年津村農草園ニテ木村撮影)

びらうどあふひハ元來西洋ノ藥草デ葉及根ハ廣ク粘滑藥トシテ藥用ニ供サレ我國ニ於テモ藥局方ノ制定以來醫藥品トシテ局方ニ收載セラレ今日ニ及ンデ居ルガ今同改正ノ第五版藥局方デハ之ヲ削除シ專ラ國產ノとろ、あ

トト思フ
誰モガ直チニびらうどヲ連想スルガ故デ
サレタ新和名デアル、蓋シ其葉ノ觸感ハ
アラウ、コノ命名ハ昭和五年十月津村藥
用植物園ニ於テ爲サレタガ未ダ廣ク發表
サレテ居ナイノデ茲ニ之ヲ御紹介スル、
コノアルテアニハ從來うすべにたちあふ
ひナル和名モアルガ、コレハ同屬たちあ
ふひ (A. rosea Cav.) ノ淡紅色品(此種ニ
ハ種々ノ花色ガアル) ト間違ヒ易イノデ
其名稱ノ優劣ハ今茲ニ論ズル迄モナイコ

びらうどあふひ



とろよあふひ (Hibiscus Manihot L.)

(津村 薬草園ニテ木村撮影)

ふひ即チ黃蜀葵 (*Hibiscus Manihot* L. = *Abelmoschus Manihot* Medic.) 根ガ代用サレルコトニナッタ、從ツテ其生産量ハ年々低下シ來ツタガ我國內地ノ氣候ニモヨク適シ其栽培ハ極メテ容易デ現ニ我東京府下ニモ年々五反歩程ノ栽培ガ行ハレテキル
びらうどあふひノ栽培ハ春三月下旬カラ遅クモ五月上旬迄ニ畦幅二尺二寸、株間一尺一一尺五寸位ニばらまきシ發芽後五月中旬及六月下旬ノ二回、反當下肥三百貫、大豆粕、米糲、木灰等約十貫(堆肥ハ用ヒズ)ヲ施肥シ夏期ニ至リ適宜摘葉及ビ摘花シ更ニ根際ニ土ヲ寄せ専ラ根ノ肥大ヲ圖レバ八月中旬ニハ早クモ根ヲ採掘シ得ルノデアル、地方ニヨリ十月下旬カラ十

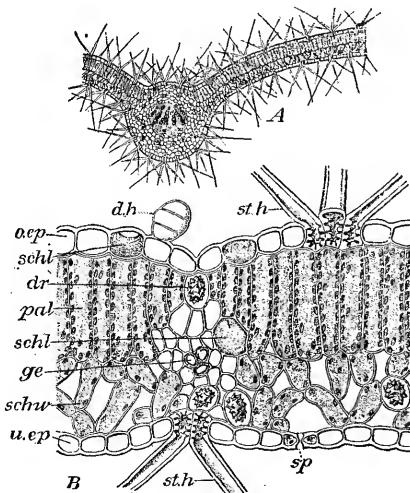
一月上旬ニ採掘サレルガ八月採取品ニ比シ根ノ品質ガ著シク劣ルヤウデアル、一反歩ノ收量ハ三十貫乃至五十貫デ時價一貫匁一圓五十錢内外デアルガ一昨年ハ五、六圓ノ相場デアツタト云フ
藥用ノアルテア根ハ其ノ根ノ枹層ヲ剝除シ乾燥シタモノデアルガ其實際的調製法ハ寫真ニ見ユル通リデアル、即チ根ヲ採掘後先づ株ヲ切り竹籠又ハ小刀ニテ皮ヲ剥ギ次デ糲糠及たわしニテ摩擦シ更ニ之ヲ四斗樽ニ入レ一仕込約一貫匁ヲ水及糲糠ト共ニ俗ニ「カンナ」ト稱スル長サ約六

びらうどあふひ

デアル

ハ特ニ調製者ノ注意スベキ點デアル

皮去リノ不充分ノモノ及ビ色澤ノ宜シカラヌモノハ共ニ藥用トシテハ適シナイノデ、ソレハタゞ製紙用ノ糊料トシテ安價ニ取引サレルニ過ギナイ、ソシテソノ販路ハ主トシテ大阪市場デ之ヲ粉末トシ主ニ賣藥原料ニ用ヒラレルガ、然シ本邦ニ於ケルソノ需用ハ案外ニ乏シクテ年額約三千斤モアレバ最早既ニ生產過剩ノ現狀

アルテア根
(木村撮影)

アルテア葉ノ横断面
o.ep. 上皮 u.ep. 粘液細胞 schl. 様状細胞 dr. 蕁酸石灰ノ
簇晶 Pal. 楔管 ge. 脈管 schw. 海綿組織
st.h. 星毛 sp. 気孔 d.h. 毛茸 (GILG)

尺ノ叉狀ノ棒ヲ用ヒ五、六分間攪拌シテ炮層ノ
除去ニ力メ直チニ筵上ニ擴ゲテ天日デ充分乾燥
スルノデアル、コノ所謂「皮去リ」ハ女手一日
一人生根約三貫々内外デアル、又所謂「水洗ヒ」
ニ時間ヲ費スト徒ラニ粘液質ヲ溶出シテ乾燥後
粉質ヲ生ズルコト少ク、又乾燥時、曇天ノ際ハ
著シク製品ノ色澤ヲ不良ナラシメルノデ此二件

びらうどあふひ



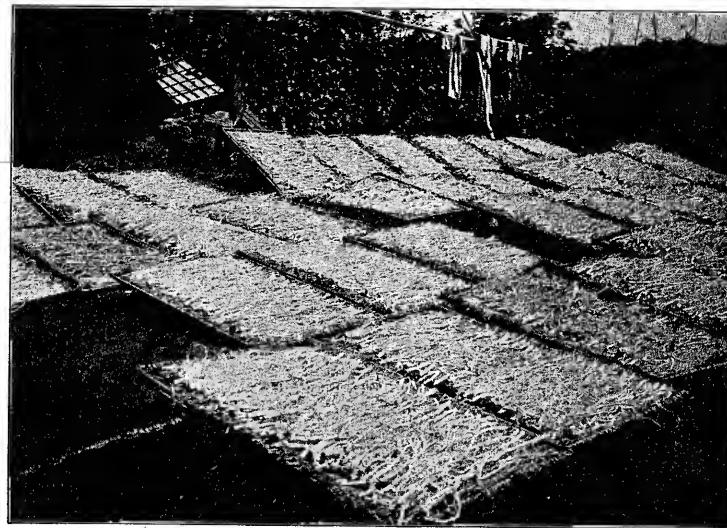
アルテア根ノ抱層剥除(東京府下三鷹村ニ於ケル) (木村撮影)

ガ此半面ニハ國產デアル黃蜀葵根ノ需用ヲ増シテキルノ
序乍ラびらうどあふひノ葉ガびろうど様觸感ヲ呈スル所以
ハ葉ニ特異ナ星毛ニ由來シ、又アルテア根ノ主成分デアル
粘液質ハ豊富ナ粘液細胞ニ含有サレルコトハ之ヲ顯微鏡下
デアル

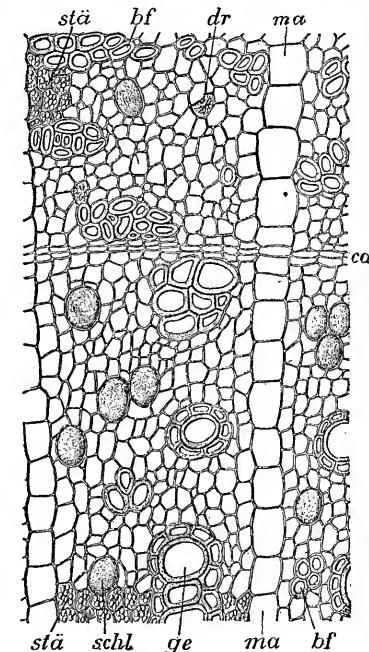


アルテア根ノ水洗 (木村撮影)

からたちばなノ胎生果實



アルテア根ノ乾燥 (木村撮影)



アルテア根ノ横断面 ma. 體線
ge. 脈管束 bf. 脈管
schl. 粘液細胞 dr. 修酸石灰ノ簇晶
stā. 濑粉粒 ca. 新生組
(GILG)

○からたちばなノ胎生果實

高知縣 吉永虎馬

ニ窺ヘバ圖ノ如ク一見シテ明カナ事實デアル

本誌本卷ノ第三號ニ久内清孝君ノ書カレタからたちばなノ果實胎生ノ記事ヲ拜讀シタガ私モ亦曾テ此レニ就テノ事實ヲ觀察シタ事ガアルノデ左ニ之レヲ述ベテ見ル

胎生果實 (Vivipary) ノ著例トシテ能ク教科書ナドニ引用セ